

な位相のあり得るうち、「中心的位相」として受け取るにしても、教理形成の過程（対異端論争）を同じ比重で考え得る限りにおいて、と言いたい。著者は、「異端との厳しくも豊かな拮抗と超克の歴史」を認める面をもちながら（p.258）、その展開の重大な一局面「神のウシアとエネルゲイアの区別」を、愛智の道行きの立場から見れば意味が薄いという形で、その意義を否定している（p.111）。東方では、上のグレゴリオスの言葉が示すように、神学の形は文化の形と深く結びついていて、内的必然性をもって展開するのである。その点アウグスティヌスの伝統の西方の事情はどうであろう。信仰、神学、文化の関係が定まらないことによって、中世に神学と哲学が並立し、それが著者が繰り返し批判する西欧近代の学的領域分化の原因とは考えられないであろうか。

以上教理視点からの論評。なお東方では魂の「自己探究」でなく啓示の「所与」から出発するのが一般であること、また神の似像（eikōn）の意味は一義的でなく、肖（homoiōma）と区別されることなどとの折り合いが問われ得る。

---

### 中川 純男 著『存在と知——アウグスティヌス研究』

創文社、2000年、314頁

片 柳 栄 一

本書を買っている問題意識、そしてこの書をユニークなものにしている著者の研究の方法は、「アウグスティヌス自身は何の説明もしていない問題、あるいはわれわれに納得できるような説明を与えていない問題」（vii 頁）、そのようなアウグスティヌスの思考の隠れた前提とでもいえる問題を抉り出し、思想史的背景にまで遡って考え直そうとすることである。こうした問題は、著者の長年のアウグスティヌス研究の中から生み出されてきた「問い」に由来するものであり、その「答え」も、手軽な要約や最新の研究の紹介で到底済むはずもなく、この著書の背後に、研究者自身の、手探りの、いわば指に血が滲むような探求の積み重ねが推測される。それだけに、読む側にも、関心と理解の共通地平を得るための忍耐が当然要求される。そしてそれは、豊

かに報われる忍耐であろう。

著者はそのような問題として二つを挙げる。これらは、著者自身にも研究の過程で、次第に明らかになってきた問題であるとのことであるが、認識の確実性の問題と、「知るものと知られるものとは同一である」というプロティヌスに由来する存在論的問題であるという。ところでこの書の英語のタイトルと思われるものが、*Knower and Known* として表紙に掲げられている。上の二つの問題も確かにここに収斂するものであり、この書の主題と言ってよいものであろうと思われる。そこでこの書評も、この点を中心に見ていきたい。

その意味で最初に第七章「精神の実体性」について見てみよう。ここで上に述べた主題が最も明確に問題にされていると思われるからである。問題はアウグスティヌスの『三位一体論』で展開される精神の自知の問題、精神における知と存在をめぐる問題である。ここでの問題は、後のデカルトのコギト、フッサールの現象学的還元にも通じるヨーロッパ精神史の最も深い鉱脈に位置する問題である。著者は言う。「アウグスティヌスの『三位一体論』が、存在と知とを結ぶ何らかの理解を前提していることは確かである。しかしそれがどのような理解であるのかは、直接的に語られることがない。知と存在とを結ぶ論理はアウグスティヌスの思惟の前提であって結論ではないからである。それゆえ、アウグスティヌスにとっての思惟の前提をわれわれの思惟の結論としようとするなら、すなわちわれわれとしての理解を得ようとするなら、アウグスティヌスにとっての前提がわれわれにとっての結論となるような探求の場をまず設定しなければならない」(198頁)。まさしく先に述べたアウグスティヌスの思惟の前提を問う探求であり、その探求の場を求めて、アリストテレスとプロティヌスの認識論を問題にして行く。

認識の受動性ということではアリストテレスに否定的なプロティヌスが、なおアリストテレスと共有する立場は、「認識するとは、認識するものが認識されるものから、形相を受け取ることである」(204頁)とするものであるという。「認識するものは認識されるものの形相を認識するものそれ自身の形相として、すなわち認識するものの実体的形相として受けとる。Aという認識されるものを認識しているものは、たんにAを認識しているものとして存在しているだけでなく、Aとして存在している」(204頁)。ここから著者はプロティヌスの存在論の基本、「認識するものは、認識しているかぎり存在する」という命題を取り出す。このプロティヌスの独自の見解を、明確に

取り出したことが、本書の功績のひとつであるといえよう。「プロティノスは、認識において受けとられる『形相』を実体的形相の意味に解釈した上で、『認識は一種の受動である』というアリストテレスの主張を継承していると言えよう。このように或るものの存在そのものであるような認識の働きをプロティノスは、アリストテレスの用語を用いつつ、エネルゲイアと呼ぶ。プロティノスにとってエネルゲイアは完全な認識であるとともに、完全な存在である」(205頁)。ここからプロティノスにおいては、可能態における「認識するもの」は認められず、その連続性もとぎれる。

そしてアウグスティヌスもこの存在論を継承しているという。『三位一体論』第十巻の精神の自己認識の解明は、精神の働きが精神の実体に他ならないことを明らかにしたものであるという。「精神の自己認識において『認識される精神』と『認識する精神』とは同じものであると言うアウグスティヌスは、『認識されるものから受け取られた形相』を『認識するものの実体』そのものであると考えるプロティノスと共通の立場に立っている。アウグスティヌスは精神の自己認識における非物的実体性の概念をプロティノスと共有している」(209頁)。

しかし共通性はここまでであり、アウグスティヌスのプロティノスとの相違は、彼が「認識するもの」としての精神の同一性、連続性を前提している点であるという。

「精神の存在が対象認識を限定する。対象認識は認識するものの存在により限定された形で受けとられた形相である。この点にかんしてアウグスティヌスの立場はプロティノスのそれと正反対であると言わなければならない」(212頁)。しかしアウグスティヌスの自己認識がいっさいの対象認識とは区別された、いわば対象認識の前提であるような認識であるのかということにかんしては、著者は慎重にも否定的である。

「なぜなら、自己を固有の認識対象と認めることは、精神にとって認識していることが存在していることであるという基本的立場と相容れないのではないかと疑われるからである。認識しているという働きに先立って存在している精神を認めることになるのではないかと疑われるからである。むしろ、われわれは精神を精神として存在せしめている根源的な認識を認めるべきではないかと思われる」(213頁)。プロティノスの精神の存在把握の特異性をアウグスティヌスがしっかり踏まえていることを見逃さない著者の洞察は深い。そしてこの根源的認識として『三位一体論』第十四巻の、至るところに現前する真理の光に「触れられている」ことを挙げていることも納得がゆく(ただ全体に典拠に挙げるテキスト箇所が少なすぎる。例えばプロティノスとの相

違を述べた箇所(210頁)などでは、より広範なテキストを挙げて根拠づけるべきであると思う。著者が禁欲的にテキストを絞っているのだとは思うが)。

評者もかつてアウグスティヌスの『創世記逐語注解』における「創造における *conversio*」を論じて、叡智的被造物(人間もその最下層に属するとアウグスティヌスは考える)において、永遠的理法を認識することによって存在の創造がなされるとするアウグスティヌスの特異な創造論を解明することに努めた。この特異性はまさに本書の著者が、プロティノスとアウグスティヌスに共通するものとして取りあげたものである。アウグスティヌス研究にとって、この共通なる精神性の理解が欠かせないものでありながら、その理解は必ずしも容易なものでない。著者が『創世記逐語注解』の創造論をも考究し、本書の如き明晰な分析がなされることを大いに期待する。

精神の自己認識に関して言えば、確かに、アウグスティヌスの自己認識は、いつも対象認識と同時であるが、しかしアウグスティヌスは *imago Dei* の形式として、自己認識をことさらに取り出している。この自己認識への集中は、著者の指摘のように、プロティノスにはない精神の連続性、自立性の意識に発したものである。そしてアウグスティヌスにおいては、直接的な自己認識と、精神の本性についての永遠的イデア的認識(可知的対象の認識)が区別されながらも(第九卷六章九節以下)、これが重なり合うような消息がある。こうした点、また *nosse* と *cogitare* としての知と、存在の関係について解明がなされないと、この主題については未だ不十分であるように思われる。

魂の不死性の論証をめぐる第六章、第九章においては、アウグスティヌスの「ある」の実体的理解の独自性が指摘される。アウグスティヌスの論証のかなめは、「基体において存在するものが、存在するなら、基体も存在する」ということであるが、著者は、アウグスティヌスがアリストテレスの実体と付帯性の区別を別様に受け取っていることを鋭く指摘している。

懐疑論をめぐる第三章では、思われという受動的状態を対象とする「知っている」という主体的認識に、知の確実性の根拠をアウグスティヌスは求めていると著者は解している。評者は、『アカデミア派論駁』の主題は、懐疑主義者に知の確実性を明示することではなく、アカデミア派の「懐疑する知者」という考えの矛盾をつき、真理探求における懐疑の正当な位置づけをすることにあると見るので、著者の論の展開は半ばまでしか受け入れられないが、「知の確実性の根拠が『わたし』にあるとは、

個々の思われを取捨選択することのできる可能性の根拠が『わたし』にあるということである」(95頁)という指摘はよく考えられたものだと思う。著者の関心がいつも「知るもの」と「知られるもの」をめぐるということが知られる。

『教師論』を扱った第四章でも同じ事柄が、次のように言われている。「与えられた認識が知であることを規定するのはアウグスティヌスにとって、認識されている対象のあり方、すなわち認識されている内容ではない。認識しているという働きは、『ことがら』そのものを対象とする認識であれ、『ことがらの像』を対象とする認識であれ、この意味での認識対象を有している。認識しているという働きに、いわば内属する『認識されるもの』を有している。このような内属する対象についての、それがどこにあるかの自覚をともなった認識が知なのである」(129-130頁)。これは現代の現象学などが問題にしていることにも通じる鋭い洞察だと思う。

このように本書は長年の考究が熟して実を結んだものであり、我々が共同して立つべき研究の場をも明らかにしてくれる労作であると思う。

---

中山 善樹 著

『エックハルト ラテン語説教集——研究と翻訳』

創文社、1999年、508頁

岡 安 喜 代

本書は著者の、『エックハルト研究序説』(創文社、1993年)に続くエックハルトの研究書であるとともに、『キリスト教神秘主義著作集7 エックハルトII 創世記注解 ヨハネ福音書注解』(教文館、1993年)に続く、いま一つのエックハルトのラテン語著作の大きな翻訳でもある。本書は、第一部を研究篇とし、エックハルトの聖書解釈の方法についての考察から始まって、その主要テーマをテキストに則って解説し、第二部の翻訳篇を準備する。第二部は、エックハルトの五十六篇のラテン語説教、シュトウツガルト版批判的校訂版全集ラテン語著作第IV巻の全訳である。総序論に記されているように、この説教の位置づけについては、エックハルトの未完の『三部